

令和 6 年度 第 3 回羽曳野市子ども読書活動推進委員会会議録（要録）

日 時： 令和 7 年 2 月 4 日(火) 10 時 30 分～12 時 00 分

場 所： 羽曳野市役所 A 棟中・東会議室

出席者：（委員）江川委員、大西委員、佐原委員、高崎委員、永尾委員、藤井委員、
前田委員、間下委員、脇谷委員（五十音順）
（教育委員会）村田教育長、田中教育監兼生涯学習部長
（事務局）藤本館長、白江主事、岩佐再任用職員

欠席者： 畑委員

傍聴者： なし

次第

1.開会

教育長あいさつ

事務局より、会議録の要録を WEB 及び中央図書館にて紙ベースで公開すること、そのため会議を録音することを報告

委員の紹介、出席者 9 名で委員会成立の報告、事務局職員の紹介

2.議事

1. パブリックコメントの実施結果について

2. 第 4 次羽曳野市子ども読書活動推進計画（最終案）について

3.閉会

教育監兼生涯学習部長あいさつ

議案説明

1. パブリックコメントの実施結果について

配布資料「第 4 次羽曳野市子ども読書活動推進計画にかかるパブリックコメント意見」に基づき、パブリックコメントへの意見概要の報告と市の考え方について説明。

2. 第 4 次羽曳野市子ども読書活動推進計画（最終案）について

配布資料「第 4 次羽曳野市子ども読書活動推進計画（最終案）」に基づき説明。

意見等

○第 4 次羽曳野市子ども読書活動推進計画（最終案）について

・1 ページ 3 の(2)『多様な子どもたちの読書機会の確保』について、8 ページに「障害をもつ子どもに、さわる絵本や点字本、録音図書など、障害の状態に応じた資料の提供に努めます。また、外国語を母語とする子どものニーズに応じた資料の提供に努めます。」とあるが、この言葉だけだと具体的にどうなっているのかがよく分からない。障害を持つ

子ども達を含め、今は学習障害やディスレクシア、ADHD等で子どもが小さい時に、大変な思いをした家庭がかなりある。また外国語を母語とする子ども、日本語が話せない、十分ではない子どももかなりいる。最近は大阪府でも、学級に1人か2人は外国語を母語する子どもが在籍していると聞く。そういうところへの支援、具体的に何ができるかがこの計画を見ているだけではよく分からない。本だけ充実しても絶対に子どもが本を読むようにならない。やはり、本を手渡す人、繋ぐ人が必要なので、その辺りの記述がもう少しあってもいいのではないかと思った。

→計画の中身については、あくまでも施策を実際の行動に持つていくための指針のような位置付け。その中には具体的に書いている部分もあれば、予算を伴う取り組みもあり、この計画に挙げることが難しい部分もある。第4次計画の策定後は、次の計画が策定されるまでの5年間、毎年フォローアップをさせていただく。令和7年度にどういう取り組みをするかを事務局より関係先へ調査依頼をかけ、それをまとめて、皆様にご提示し、ご意見をいただき、それを令和8年、令和9年と続けていく流れになる。その中には、新たな取り組みもあれば、これまでの取り組みも記載いただくことになる。既存の取り組みについては、参加者が伸び悩んでいるがどうすればいいか、といった修正や振り返りをする。新たな取り組みについては、この委員会の中で情報共有をさせていただき、進めていけたらと考えている。

→外国語を母語とする児童、生徒への支援については、具体的にこの学校にこの生徒がいるから支援することも今後発生するかもしれないが、外国語での記載がされた図書は比較的高価なものになっており、それを購入するにあたっては思うようにいかない部分もある。ただ、予算の許す限り、そういった外国語を母語とする児童、生徒への図書も年間で何冊かは購入している。

→例えば家庭の事情や、外国語を母語とする児童、生徒、また障害のある方等の困っているところへの支援については、図書館だけで解決するのは容易ではないので、そのような事案があれば関係各課、また団体の皆様と協議をさせていただきながら、支援を進めていきたいと思う。

・電子図書は読書推進の切り札にはならないと思う。結局、読書は何のためにするのか。スウェーデンでは、電子媒体からまた紙に戻ろうとする動きもある。電子図書はコンテンツの中身があまり充実したものではなく、大前提として予算や人は増やさない今の厳しい地方財政のもとではきついのではないかと感じる。

→最近は本市も含めて各自治体が電子図書を推進している。予算を伴うので、年間で新たなコンテンツを揃えていくのも難しい中、児童、生徒に対しての取り組みとしては50冊がワンセットになった読み放題パックを毎年購入しており、児童生徒等が現時点において、どういった本を読むのがふさわしいかを図書館の司書が選書し、各学校においては、全ての児童生徒に配布されているタブレットを通じて、いずれも読んでいただける環境を整えている。電子図書もあり、また紙の図書があり、その時々を使い分けをしていただき

ながら、電子と紙、どちらが自分にとって向いているかは読む側が判断しながら利用していただきたいと考えている。図書館としては、どちらを使うことも可能だという環境整備を今後も継続していきたい。

・8ページの4『学校園での読書活動の推進』の「「朝の全校一斉読書」をはじめ、小・中・義務教育学校における読書活動を一層推進します。」ということだが朝読は、全校で行われているのか。また中学校ではどうなっているのかを知りたい。

→具体的に何校で朝読に取り組んでいるかは今お示しできないが、ほとんどの学校で朝読に取り組んでいただいているかと思う。また学校によっては「朝学」、つまり学習を週の中で計画的に取り組んでいる。タブレットを活用した教育が進んでいる中で、言語活動の1つとして必要な力だということもあり、キーボードのタッチタイピング等を朝の時間に取り組んでいる学校もある。

・恵我之荘小学校では朝読の時間にボランティアや父兄が行って読み聞かせをしていると聞いている。そういった取り組みが、なぜ全校でなされていないのかと思う。年に何回かでもご家族が子ども達に読み聞かせをしていただける機会があれば子ども達はより本が身近に感じると思う。中学校に関しては、さらに専任の司書がいないので、そこはよりPTAやボランティアや地域の方の協力を得て、中学生に直接誰かが本を手渡してほしいと思う。

・現在、自分の子どもがいた他市の小学校にボランティアで読み聞かせに行っている。保育園で勤務している中でも、絵本は大きくなってから小学校や中学校でも読んでもらう機会があってもいいのではないかという気持ちがあった。ボランティアは1年生から4年生までを対象にしている。4年生にとっては簡単かもしれないが、それでもすごく真剣に見てくれている。羽曳野市でそういった機会が無いのであれば、作っていただければと思う。とても良い取り組みなので、ぜひ計画に入れていただけたらと思う。

・連日、小学校のおはなし会に行かせていただいている。絵本を読んだ後、子ども達に児童書を含めて3冊ほど、短いものだがブックトークをしている。子ども達はとても興味を持って聞いてくれ、手に取って、実際貸し出しにつながっているという話も先生から聞いている。そうした取り組みに保護者が入ると、家庭で子ども達とご家族が本を間にいろいろな話ができる機会が増えてくると思う。一日中、子どもがずっと1人でゲームをしているような時間が少しでも親子で本を間にする時間になるように学校や図書館が力添えをしていただけたらと思う。そこに繋がるような計画が、また5年後の活動計画に入っていけばいいのではないかと思う。

・昨年12月にいただいた計画案と、今回出た計画案に変わりはないが、パブリックコメ

ントで意見があったことは今後この計画が実施に至るときに市からの答えが生かされるのか。この計画は指針で実際に行う際には、現状からこの年はこれだけのことをやってみる目標を立て、その通りに進んでいくような流れだと思うが、できれば具体的に今何%だからここまで頑張りたいという数値目標を挙げた方がいいのではないかな。できるだけ学校司書が配置されるようにするにはどうすればいいかということをもう少し考えていただきたい。

○その他

- ・子どもの読書推進は今の社会全体にゆとりがなく非常に難しい。だからある程度、こういった読書推進計画を立てて一生懸命頑張ってもあまり成果が見えないと思う。でも「やっていますよ」、「大切ですよ」といったアピールは大事ななのかもしれない。

- ・子どもの読書推進の伸びしろの1つは学校図書館。絵本を読んでもらう段階から小学校へあがって自分で本を読むという段階、ここに1つの壁がある。みんなが必ず行く学校での読書活動を、学校司書を中心に充実させることが大事だと思う。ヤングアダルトの読書離れが深刻な中で、中学校に学校司書が十分配置されていない現状がある。子どもの読書推進は苦しい状況だと思う。

- ・丹比小学校で地域の方に本を読み聞かせしてほしいと話があったそうで、参考になったら図書館で行っている私たちのおはなし会にその地域の方が来られた。「他のおはなし会にも行って、どんなことをしているのか自分なりに勉強している」、「その地域で読み聞かせをしてくれる人いませんか」ということで手を挙げたとおっしゃっていた。もしかしたら地域でも声をかければ、やってみようという人がいるかもしれないが、どんなことをしたらいいのか分からないと思うので、できればそういった人を対象に、図書館で読み聞かせ等について知ってもらう機会があればいいのではないかなと思った。もっと地域の方の力を学校へ、一緒に育てていこうといった事業を考えられたと思う。またそういう機会があれば、図書館も力添えしていただけたらと思う。

- ・以前、図書館でのおはなし会で、小学校3、4年生ぐらいの子達が聞いてくれていた。読んでいた絵本に「お気の毒」という言葉が出てきた時、その子達は「何の毒？」と聞いてきた。つまり、その「お気の毒」という気持ちや言葉を知らなかった。そのことに驚いた。昔話をすることもあるが、白や杵等は今の子ども達は分からないだろうということで絵本選びも題材も、少し工夫している。分からないままでいいと言う方もいるが、せっかく子ども達が聞いてくれるならイメージできる方がいいかなと思う。子ども達が本を読まない、ということにピンときていなかったが、そういう現実があるのだと思った。

- ・やはり子ども達は本やおはなしから、言葉だけではなく、言葉の中にある意味をしか

り受け取って聞いているということ。その中で子ども達がいろんな想像力を養い、またそれが人生の糧になる。私自身の経験で言うと、本にたくさん助けられたという経験がある。本を読むことは良いことだと誰もが分かっているが、それでもこれだけ本が読まれていないことが本当に不思議。

・新聞等で、文部科学省が紙の教科書とデジタルの教科書を選択できる制度の導入を検討しており、令和8年度の制度改定を目指していると報道があった。この先、ほとんどデジタルの教科書が主流になるような方向に行くのかと危惧している。デジタルは、情報を管理するためには便利。図書館のイベントについてSNSで周知すると来館者も増えるので情報発信ツールとしてはすごく有効だと思う。ただ、子どもたちの読書や学習に関しては違うことを基本として捉えたうえで活動計画は進めていってほしい。